みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

「語り直し」される社会主義の歴史

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001398

小長谷有紀編『モンゴル国における20世紀(2)── 社会主義を闘った人びとの証言』
国立民族学博物館調査報告　71:1-9(2007)

「語り直し」される社会主義の歴史

小長谷有紀
国立民族学博物館研究戦略センター

2006年，モンゴルは建国800周年を祝って国際的な観光ブームに沸いた。800という数字は，1206年にモンゴル族の覇者テムジンが，後世にハーンとよばれるカン（汗）の位を得たことに由来する。しかし，現在の国家の直接の前身は，もちろん800年さかのぼるわけではなく，モンゴル人民共和国であり，それはソ連に続いて世界で２番目に社会主義国となった国家であった。どのような道をたどって社会主義国として発展してきたのであろうか？

1920年代からの歩みについて，これまで当事者による記録として『モンゴル革命史』（1971）や『社会主義モンゴル発展の歴史』（1978）がすでに邦訳され，また1961年および1964年の現地レポートを含む，ラティモアによる解説も『モンゴル─遊牧民と人民委員』（1966）として邦訳されていた。ラティモアはモンゴル人民共和国をソ連の「衛星国」と表現した。すなわち，モンゴルは世界で１番目の「衛星国」なのである。

日本人研究者による解説としては，田中克彦による『草原と革命─モンゴル革命50年』（1971）や『草原の革命家たち─モンゴル独立への道』（1973）のほか，磯野富士子の『モンゴル革命』（1971）などがあった。

こうした書籍によって，モンゴルにおける社会主義的近代化の歩みは一般に紹介されていたけれども，民主化以降1990年代になると，歴史の見直しすなわち「語り直し」が行われており，新たな解説が必要となっている。

モンゴル人自らがいち早く過去に対して批判的な『モンゴル現代史』（1996）を英語で著すと，早速2002年に邦訳された。また社会主義を終えたという時点に立って，『モンゴル─民族と自由』（2002）や『モンゴル民族の近現代史』（2004）が刊行された。これらはいずれも短いながらも私たちの理解を容易にしてくれる。とりわけ，粛清について特別に紙面を割いている点が特筆されよう。また，旧来の解説書であった『草原の革命家たち』の場合は，増補改訂版（1990）というかたちで新しい解説が付け加えられている。

モンゴル国の正史もまた同様に「語り直し」が行われている。モンゴル科学アカデミー歴史研究所によって監修された３巻本の『モンゴル史』（1969）は1988年に上下２分冊で邦訳されていたが，民主化以降の2005年には５巻による『モンゴル史』（2003）が新たにモンゴルで刊行された。しかしながら，チンギス・ハーンなどの遠い過去の賞賛に力点をおいて近現代史以前を加えたという大幅な変化に比べれば，近い過去についての「見直し」はやや少ない。かつて社会主義時代を単独で担ってきたモンゴル人民革命党

が現在，依然として政権を担っており，その指示のもとでは「語り直し」が必ずしも十全でないのは当然であるかもしれない。

本格的な「語り直し」は今後，さまざまな立場の異なる声の重奏によって行われていくことになるであろう。本書はまさに，そうした「語り直し」を当事者の生の声を聞くという生来の「語り」によって実現し，「社会主義的近代化とは何であったか」をめぐる歴史について「語り」による復元に努めるものである。

社会主義時代には多くの英雄が作られた。『草原の革命家たち』の増補改訂版に終章として加えられた「最初の７人」とは，1920年にモンゴル人民党からモスクワへ派遣された人びとである。この中でとくにD.スフバートルは，政庁前中央広場にその騎馬像が建てられ，革命初期の最大の功労者として賞賛されてきた。彼は，革命初期の栄誉を一身に集めるべく選ばれた存在であり，そうして世界中に知られてきたので，それゆえに当該時期を「スフバートル時代」と呼ぶのは妥当であろう。

この「スフバートル時代」は決して平坦な道ではなかった。1922年にD.ボドー首相ら14人が「反革命の陰謀」の罪で処刑され，続いて1923年にはまだ若かったスフバートルが「病死」する。

最近の新聞記事（2006年３月16日付モンゴル語Daily News紙）によれば，社会主義時代に長らく安置されていたスフバートルの遺体はそもそも彼自身ではなかった。2006年，政庁前中央広場にチンギス・ハーン宮殿を建設する目的で，社会主義時代を象徴してきた英雄廟を取り壊し，廟内から遺体を運び出すと，遺体はたった156㎝しかなく，「ゴエモン・バータル（うどん勇士あるいはそうめん英雄）」というあだ名を付けられるほど長身で知られていたスフバートルではないことが判明した。死因の隠蔽のみならず，そもそも革命の英雄が政治的な創作であったことそのものを象徴しているように思われる。

スフバートルに続いて，D.ボドーのあとを継いだジャルハンザ・ホトクト・ダムディンバザル首相も「病死」する。翌1924年５月には，モンゴルにおけるチベット仏教界の首長であったジャブツンダンバ・ホトクト（活仏）が「病死」し，そのあとを継ぐはずの転生者の捜索は実質的に禁じられた。また，同年８月には第３回人民革命党大会議の席上で，S.ダンザン首相が国家反逆罪に問われて拘束され，裁判も行われないまま直ちに銃殺された。その後まもなく「モンゴル人民共和国」は誕生した。

このように短いあいだに，「反革命」や「反国家」という汚名を着せられて死んだ人，死して奉りあげられた人，奉りあげられていながらも死ななければならなかった人，というように立場は異なるものの，幾人もの犠牲によって新しい国家は生まれたのである。これを率いていくのが「最初の７人」の最後の１人であるKh.チョイバルサンであった。彼は，人びとから「マーシャル・チョイバルサン（チョイバルサン元帥）」あるいは単に「マーシャル（元帥）」と畏敬の念をもって呼ばれた。

1930年代から，彼がほぼ独裁体制を維持するので，「チョイバルサン時代」と名づけられてきた。ただし，本格的な「チョイバルサン時代」が到来するまでには，「右派日和見主義（右翼偏向）」や「左翼偏向」などと名づけられて批判されるような路線闘争が繰り広げられ，1936年になって「チョイバルサン時代」は確定的となる。なぜなら，国家の首班が名目的に軍事を管轄するという以上に，まさに元帥と仰がれる軍人だからこそ国を率いていく，という路線が妥当となる時代背景が生じてきたからである。

モンゴルとソ連とのあいだですでに1934年に結ばれていた協定は，1936年，相互援助議定書として締結し直された。こうした協定に基づいて，日本の進出をはばみ，モンゴルを緩衝地帯として維持すべく，ソ連軍がモンゴルに進駐した。と同時に，モンゴル国内の不穏勢力は一掃しなければならないという政治目標も掲げられ，この目標を果たすために，ソ連の組織を模しつつ，モンゴルの内防所が内務省に格上げされ，チョイバルサン元帥がその大臣となった。

この「チョイバルサン時代」には，人民革命以来の最大の課題であった，チベット仏教対策として，「上級僧侶」に分類された高僧たちが大量に虐殺された。処刑された僧侶の数は，人気歴史作家バーバルによる最新の通史『モンゴル人―移動と定住』によれば，16,631人にのぼる（Baabar 2006：405）。2002年，首都郊外の工事現場から大量の人骨が発見され，高僧らがまとめて処刑された場所であると比定された。2005年に刊行された小冊子『ハンビン・オボー丘の骨は何を語るか？』はモンゴル語と英語で発掘現場の様子を伝えている。また，1920年代にソ連領土内から南下してモンゴルに入植したブリヤート人たちも，反革命軍であったとか，日本のスパイであるといった嫌疑をかけられて大いに虐殺された。スターリンの要請に応じた粛清がモンゴル国内においても実行されたのである。

モンゴルにおける伝統的な知識人を容赦なく処分する残虐な行為に対して批判的な政治家は当時，決して少なくなかったけれども，彼らもまた次々と粛清されていく。たとえば，P.ゲンデン首相は1937年にモスクワで日本のスパイであるという容疑で逮捕されて毒殺され，M.デミッド国防大臣はモスクワへ向かうシベリア鉄道で毒殺された。また1939年にはA.アマル首相が反党グループのリーダーとして逮捕され，モスクワで尋問され，1941年に処刑された。このような政治家たちの悲劇はボルドバータルの『20世紀のモンゴル政治家たち』（2004）で一覧することができる。粛清に関しては，名誉回復のための国家委員会が設けられているほか，「モンゴル政治粛清同盟」などのNGOが，ドイツのコンラッド・アデナウアー財団やアメリカのソロス財団などから支援を得つつ，被害について丹念に報告する書籍をシリーズで刊行している。

モンゴルにおけるこうした粛清は，ソ連の直接的な指導のもとに実行されていたが（Bawden 1968：331など），Kh.チョイバルサンにとっては自らの政敵を排除することに成功した，とみなすこともできよう。そして，こうしたソ連との連携にもとづく粛清

の手法は，当のKh.チョイバルサン自身にも及ぶのであった。彼は1952年にモスクワで手術中に死亡した。

今日の首相に相当する閣僚会議議長の座がKh.チョイバルサンの死によって空席であったところ，モンゴル国会議事堂内にある電話機が鳴り，Y.ツェデンバルの就任を祝うメッセージを伝えた，とモンゴル人のあいだでは密かに伝えられている。このような特別な配慮による「間違い電話」に導かれて，首相の不在は解消されたらしい。

こうして1953年にKh.チョイバルサンのあとを継いで指導者となったY.ツェデンバルの時代は長い。「ツェデンバル時代」は実に1984年の解任まで続く。Kh.チョイバルサンの死から数えると30年余にすぎないが，それ以前，1940年にモンゴル人民革命党書記長に就任した時から数えると，40年余におよぶ。党あるいは国家の幹部の地位にかくも長期にわたって居続けたのである。これまであまり知られてこなかったけれども，その間，いくつもの政治的陰謀が実行された。

なかでも大いに知識人を巻き込んだものとして，「知識人の迷妄」やチンギス・ハーン崇拝にかかわる事件がある。1956年，ソ連でスターリン批判が開始されたことと連動して，自由な雰囲気のもとで批判的な言動がモンゴル社会に広まっていく。こうした風潮は「知識人の迷妄」と名づけられ，多くの人びとが「反ソ的である」という理由により，職場から解任されたり，党から追放されたりした。また，1962年のチンギス・ハーン生誕800周年行事では，多くのエリート知識人が「民族主義者」というレッテルを貼られ，投獄されたり，地方へ追放されたりした。かつての「反革命」あるいは「日本のスパイ」といった冤罪のためのレッテルに代わって，「反党」，「反ソ連（親中国）」，「民族主義」というレッテルが用いられるようになっていたのであった。

このように，モンゴル人民共和国の歴史は，社会主義の理想のもとに発展した産業史である一方で，一面では暗殺，虐殺，追放などの粛清に満ちた歴史でもあったことが了解されよう。そうした幾多の粛清については，社会主義時代にその詳細が明らかではなかったため，現在，積極的に「語り直し」が行われているのである。本書ではそうした歴史的記述に資するために，政治の舞台の中心にいた当事者たちの「語り」を資料として提示する。

本書は，Y.ツェデンバルによる長期政権の維持メカニズムに焦点をあてた，当時の政治家たちのインタビュー集である。とりわけ1964年のモンゴル人民革命党中央委員会第６回総会での批判に焦点をあてた。なぜなら，当時，Y.ツェデンバルを激しく批判した人たちが生き証人として生存しているからである。この政治的事件については，正史『モンゴル史（３巻本)』ではたった２行，記されていただけであった。民主化後あわただしく書き直された新しい正史『モンゴル史（５巻本)』では総じて彼らによる批判の正しさも評価されてはいるが，中央委員会第６回総会について明記されているわけではない。一方，バーバルの通史ではこの時期を「最後の一撃」と名づけている

（Baabar 2006：534）。1950年代から続いてきた批判がこの１件でピークに達し，その処分の厳しさゆえに，人びとはその後，表立って批判を口にしなくなることを形容している。

そもそも，当時いったい何について異議申し立てが行われたのであろうか？

社会主義を建設するにあたってモンゴルでは，学校を卒業するたびに優秀な学生が選抜されていた。しばしば本人の興味如何にかかわらず国家に必要な部門に留学させて，人材養成を果たし，登用していく，という一定のシステムが確立されていた。ところが，Y.ツェデンバル時代にはそのようなシステムがうまく機能せず，能力の有無よりも出身地によって，すなわちY.ツェデンバルの同郷人が重宝されている，という批判が行われていた。ただし，より重要な問題は，経済発展の方法であった。ソ連からの援助は債務として蓄積する一方で，いっこうに自立的な発展が見られないことが問題視されていたのである。確かに創意工夫による自由な経済活動は阻害されていた。おりしも中ソ対立が激化し，中国からの輸入物資が激減して市民生活が打撃を受けていたことも時代背景として大きな影をもたらしていた。すなわち中ソ両大国にはさまれたモンゴルが，ソ連に一方的に頼ることの危険性が指摘されていたのである。また，Y.ツェデンバルをはじめとする高官たちの特権的な生活が，一般的な国民生活から遊離しているという点も問題視された。さらにまた，KGBとつながりがあるとされるロシア人妻フィラトワが人事問題に介入していた点は大いに弊害であるとされた。そして，この夫人問題こそは，Y.ツェデンバルが1984年にモスクワ滞在中に「解任」されるという結末の，直接的な原因であったと今日，見なされている。

こうしたもろもろの批判点は，現代でもあまり変わることがないように思われる。もちろん，現在は市場経済へ移行したために経済面では自由が保障されている。ただし，それは同時に貧乏になる自由も大いに保障するものではある。また，人材登用については，現在では同郷人という地方ネットワークの意義は相対的に低下しているものの，ビジネス上で取引関係のある人脈に依存するという傾向は明白である。またファーストレディの影響力も無視できず，ロシア人ではなくなったというだけの違いくらいが指摘できよう。政治力を姻族が提供するという構造は，社会主義化のはるか以前から，政敵の正妻を略奪して姻族による支援を絶つという習慣に認められるような歴史的伝統を今日に至るまで継承している姿なのかもしれない。現在では，ソ連の圧倒的な援助に代わって国際機関や複数の国が援助するようになっており，中国との経済的交流も強まっている。しかし，だからといってロシアの影響力が消滅したわけではない。民主化直前の1985年のD.トムルオチルの不審な死も，民主化後の1998年のS.ゾリグの暗殺も，10月２日に生じており，奇しくも1937年の粛清開始を思い起こさせると人びとは噂している。今日なおロシアの影響は政治的抑圧として感じられているといわざるを得ない。さらに開発援助については，もっぱらソ連に頼るという状態から複数の諸外国に頼るとい

う状態に変わったにもかかわらず，不要品が定額で売りつけられたり，専門家の派遣にかかる費用が債務として計上されることもある点など，かつて批判されていた事態が今日なお同様に認められる。まったく異なるのは，現在では，かつて社会主義時代には認められなかったほど大きな経済格差が，地域的にも，世帯ないしは個人間にも，認められることである。現在，多くの政治家は同時に財界人であり，彼らは利権を貪って各種の特権を得ている（Rossabi 2005）。こうした不公正な現状は，かつて社会主義時代において高官たちなら列を作って並ばなくとも特別店で容易に肉を買うことができた，などといったささやかな優越ではもはやない。以前にも増して問題は大きくなっているといわざるを得まい。国際的な援助を投資する必要性そのものが大いに問われるべき状況に至っているという点は，社会主義時代とまったく異なっているだろう。

以上のように，彼らの批判した諸問題は，もはや社会主義ではない現時点にもかなり通用する。そのことは，彼らの抗議が社会主義そのものへの批判ではなかったことと呼応している。当時は，社会主義に対する否定としてではなく，あくまでもY.ツェデンバルの独裁体制に対する批判として表出されていた。共産主義のために，正しい共産主義を求めて，当時の社会主義のあり方について異議申し立てが行われたのである。この異議申し立ては，社会主義か，資本主義かあるいは市場経済かを問わず，国家経営の問題点として議論するに値する批判となっているだろう。

1964年の当該総会の2日後に，モンゴル国内の政争を伝えて真のコミュニストへの支援を仰ごうと，中国，ポーランド，ルーマニア，ソ連などに手紙が書かれていた，とされている（Barbar 2006：302）。当該総会で批判演説を行ったのはたった2人にすぎないが，こうした批判を支持する人びとも大勢いたのだと，この手紙から理解することも不可能ではない。ただし，一方で，たとえどんなに強い異議申し立てであろうとも正常な手続きのもとで実施される「国会での質問」をただちに「反逆罪」として成立させるためには「反政府グループ」を作る必要があったために手紙が捏造された，と見ることもできる。手紙に限らず，そもそも資料の存在は事実にすぎず，真実を示す保証にはならない。歴史資料というものは，当事者の「語り」が主観的であるのと同じ程度に，時代を支配した状況に即して主観的である。だからといって史料の価値が目減りするのではないように，語りそのものも史料として重視されるべきであろう。とりわけ社会が抑圧的であればあるほど，公式見解は多くの事実を隠したり，真実を大いに秘したりするがゆえに，当事者による語りは傾聴に値する。

当時の批判者たちの声をいま聞き取ることができるのは，彼ら当事者が地方へ追放はされたものの処刑はされなかったからにほかならない。このことの意味は十分に理解されておくべきであろう。すなわち，社会主義時代が政治的弾圧の連続であったとしても，その弾圧の質は社会主義時代を通じて決して一様ではなかった。

社会主義を終えた現在，Y.ツェデンバルに対する批判が自由に行われるようになっ

た一方で，擁護派も声をあげている。彼の息子ゾリグが回想録『最後の７年』(1993) を著しているほか，Y.ツェデンバルの名誉を守ろうとする目的でジャーナリストN.バトバヤルやモンゴル国立大学で教鞭をとるTs.ジャンバルドルジたちによって設立されたY.ツェデンバル・アカデミー研究所が，Y.ツェデンバルの業績を列挙する『Y.ツェデンバルからP.オチルバトまで』(2000) や回想集『Y.ツェデンバル―人びとの思い出』(2002) などを出版している。擁護派の中には，Y.ツェデンバルの護衛官に相当するであろう忠実な部下の１人としてL.バトツェンゲルが著した『私の知っているY.ツェデンバル』(2001) なども見受けられる。また，ロシア人ジャーナリストであるシンカリョフは中立的な立場で評伝『ツェデンバルとフィラトワの２人―愛情と権力と悲嘆と』(2004) をものしている。

本書では，側近でありながらも追放され，追放されながらもあくまでもY.ツェデンバルを擁護する立場をとるS.ジャランアージャブ氏の証言と，肉親として実弟からの証言を得た。

さらに，最後の側近の１人とされた政治家であるソドノム氏，ならびに最後の事務的な処理を担当した政治家としてオチルバト氏らとのインタビューも試みた。両氏はいずれも親日派として知られており，比較的中立的な立場から発言している。Y.ツェデンバルの解任に直接たずさわった政治家たちの多くが，民主化直後，類似の「病」を得て亡くなっているため，本書ではY.ツェデンバルの解任後に首相や大統領として政治的な最高指導者になった人たちから，解説を得た次第である。彼らの語りからは，権力の中心にいながらも決して自分の思い通りに生きることができたわけではなかったY.ツェデンバルの人間像が浮かびあがるであろう。

本書で語り手として登場する６人については，それぞれの語りの前に，簡単な解説をほどこした。それぞれの語りにはそれぞれの意味があり，全体として多声性 (polyphonic) が確保されるように試みている。ただし，あくまでも政治家による構成であり，決して一般国民の声を集めたものではない。したがって，いかなる声をさらに集めるべきか，という点に関する詳細な議論は今後に譲りたい。

どの人の語りにおいても印象的な場面はあるものだが，この一連のインタビューの最初にB.ニャンボー氏と会い，Y.ツェデンバルが急に立派な服装を着るようになったという話に及んだとき，Y.ツェデンバルがまるで活仏に突然選ばれることになった幼子のように思われた。彼が選ばれたのはもちろん決して偶然ではあるまい。

第１に，イルクーツクでロシア語を学んでいたこと。ロシア語はよくできるけれども，決して才気あふれて狡猾な人材ではなかったようである。傀儡する側にとって俊敏すぎても困るというものであろう。

第２に，温和な人柄であること。何事にも逆情しくにい，おとなしい性格であることが必要とされたに違いない。

第３に，貧乏な出身であること。革命の正統派であるためには貧乏であることが望ましい。彼の弟の話からすれば，彼は遊牧民というよりも農民の子であったというべきかもしれない。

第４に，貴族の出身ではないこと。加えてY.ツェデンバルの場合はモンゴル族のなかでもドルベドと呼ばれるオイラート系集団であるため，チンギス・ハーンの子孫ではないことを意味しており，好都合であったに違いない。

第５に，ロシア国境付近の生まれであることも決してマイナスにはならなかったであろう。このことは今日もなおモンゴル・ロシアの国境問題として禍根を残している（田中1992：242－253）。

おそらくソ連側にとって，Y.ツェデンバルは選びに選び抜かれた人材であったと思われる。他者によって選び抜かれた優秀であるはずの人が，社会全体を長いあいだ翻弄していたのは，彼自身の罪ではなく，時代が彼に与えた「恵みの罪」であったと見るべきではないだろうか。もはや，当時のような盲目的な賞賛がありえないように，当時のような完膚なきまでの批判もまた同様にありえないだろう。

社会はその歴史をやり直すことはできないが，それについて語り直すことはできる。時代のもたらした罪を繰り返さないために，「語り直し」が求められているのであると私は思う。

私たちは現在，社会主義を実態的に喪失し，それゆえに新市場原理主義が１人勝ちをして世界を席捲し，さらにそれゆえに政治の復権をめざした試みがベネゼエラやボリビアなどで目撃される，という時代を生きている。人間の歴史は流転しつづけていくのであろう。モンゴルが歩んだ社会主義的近代化の道についての「語り」は，これからの社会をデザインするうえで１つの参考資料となるのではないだろうか。

文　献

生駒雅則
　2004　『モンゴル民族の近現代史』東洋書店。
磯野富士子
　1974　『モンゴル革命』中央公論社。
小長谷有紀編
　2004　『モンゴルの20世紀』中央公論新社。
田中克彦著
　1971　『草原と革命―モンゴル革命50年』晶文社。
　1990　『草原の革命家たち―モンゴル独立への道』（増補改訂版）中央公論社。
　1992　『モンゴル―民族と自由』岩波書店。

ツェデンバル著，新井進之訳
1978 『社会主義モンゴル発展の歴史』恒文社。
チョイバルサン他著，田中克彦編訳
1984 『モンゴル革命史』未来社。
バトバヤル，Ts. 著，芦村京・田中克彦訳
2002 『モンゴル現代史』明石書店。
モンゴル科学アカデミー歴史研究所編，二木博他訳
1988 『モンゴル史』恒文社。
ラティモア著，磯野富士子訳
1966 『モンゴル―遊牧民と人民委員』岩波書店。
Baabar
2006 “Mongolchuud―nüüdel suudal” Ulaanbaatar.（モンゴル語『モンゴル人たち―移動と定住』）
Baatar, S.
2005 “Ekh oronchid ba Tsedenbal” Ulaanbaatar.（モンゴル語『愛国者たちとツェデンバル』
Battsengel, L.
2001 “Minii medekh Y. Tsedenbal” Ulaanbaatar.（モンゴル語『私の知っているY. ツェデンバル』）
Bawden, C. R.
1968 “The Modern History of Mongolia” Columbia University Press.
Boldbaatar, Ch.
2004 “XX zuuni mongolun uls toriin zütgeltnüüd” Ulaanbaatar.（モンゴル語『20世紀のモンゴル政治家たち』）
Jambalsuren, Ts.
2000 “Y. Tsedenbalaas P. Ochirbat khürtel” Ulaanbaatar.（モンゴル語『Y.ツェデンバルからP.オチルバトまで』
Shinkarev, L.
2004 “Tsedenbal Filatova hoër” Ulaanbaatar.（モンゴル語『ツェデンバルとフィラトワ２人―愛情と権力と悲嘆と』，原語はロシア語）
Y. Tsedenbal Akademy
2002 “Y. Tsedenbal Khmüüsiin dursamj” Ulaanbaatar.（モンゴル語『Y. ツェデンバル―人びとの思い出』）
Rossabi, Morris
2005 “Modern Mongolia: from khans to commissars to capitalists” University of California Press.
Zorig, Ts.
1993（2005） “Süülchiin doloon jil” Ulaanbaatar.（モンゴル語『最後の７年』）